

2 育てるカウンセリングを生かした対話のある授業の実際

「友達と一緒に 詩画カレンダーをつくろう - 『ふしぎ』『よかったなあ』・言葉をつなげて-」(第4学年)

(1) 「思考力」とその育成に向かう対話

【単元で育成したい「思考力」】

詩における表現の繰り返しと変化に目をつけながら、連と連のつながりを吟味する力

【「思考力」の育成に向かう対話】<拡散型>

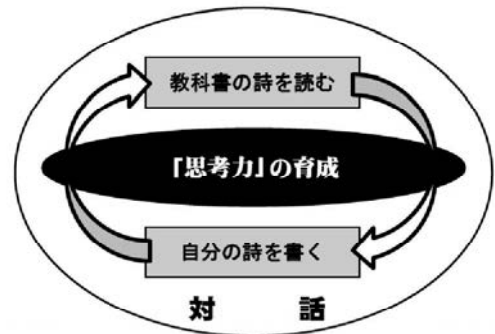
4連構成の詩の、第1～3連に対して、第4連はどのような詩がよいかを伝え合う。

本単元では、一人が一つの連を担当し、友達とリレー形式で4連構成の詩画カレンダーをつくる言語活動を設定した。この言語活動を通して、指導事項「C読むこと」のウ「場面の移り変わりに注意しながら、情景を叙述をもとに想像して読むこと」を指導した。その際、「B書くこと」のイ「段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」を関連づけた。「場面」「段落」は、本単元における「連」に当たる。教科書(東京書籍)所収の詩を、その連の移り変わりに注意して読んだり、相互関係に注意して自分の詩を書いたりする際に働くのが、上記「思考力」である。ただし、主眼はあくまで読むことにあり、書くことを関連づけながら、読むことの思考が深まることを主に意図した。

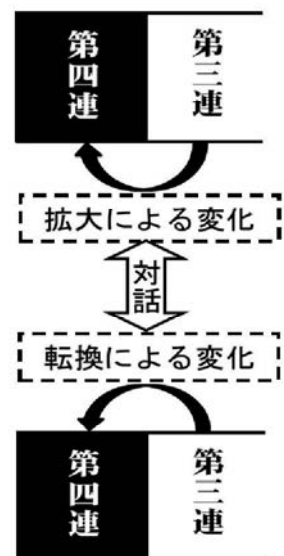
金子みすゞの詩『ふしぎ』では、第1～3連までは、自然への「ふしぎ」が、第4連では、それらを「あたりまえだ」と言う人々への「ふしぎ」がつづられている。同じ「ふしぎ」でも、第4連の「ふしぎ」は、それまでとは変化しているのである。一方、まど・みちおの詩『よかったなあ』でも、第4連が変化している。ただ、同じ第4連に変化のある二つの詩でも、その変化のさせ方が異なっている。『ふしぎ』は第4連において、前述したように、その対象が「転換」しているのに対し、『よかったなあ』では、草木に加えて、太陽や雨等の自然界の連関へと感謝の対象が「拡大」していくのである。

子どもたちは、自分たちの詩づくりに当たり、この二つの詩の変化のさせ方を手がかりとした。その際には、『ふしぎ』のような変化のさせ方、『よかったなあ』のような変化のさせ方、当然どちらに優劣があるわけではなく、個々の詩に応じて、それぞれが認められてよい。従って本単元では、クラスの中で、個々の考えの違いが認められ、共有されていく上記の拡散型の対話を設定した。子どもたちは、自分たちの詩づくりにおいて、自分が表現に合わせながら、どちらの変化のさせ方を採用するのかをめぐって対話するのであるが、同時にそれは、教科書所収の詩『ふしぎ』『よかったなあ』における連と連のつながりを再吟味し、その特徴の認識、詩の読みを深めていく過程でもある。

本単元は、このような対話を通して、上記の「思考力」の育成を試みたものである。



【「思考力」と対話と言語活動】



【変化について対話】

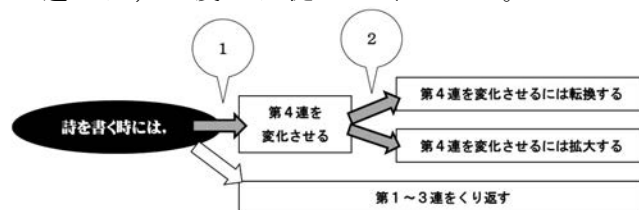
(2) 対話への支援

① 多様な考えが表出される授業構成

～段階的に学びを想起・習得させる～

実態：子どもたちにとって、「転換」「拡大」の違いは、一度には捉えにくかった。

支援：連と連の比較に加え、2編の詩を比較することで、右図のように、同じ「変化」でも、拡大と転換による変化があるという手がかりを、段階的に気付かせた。

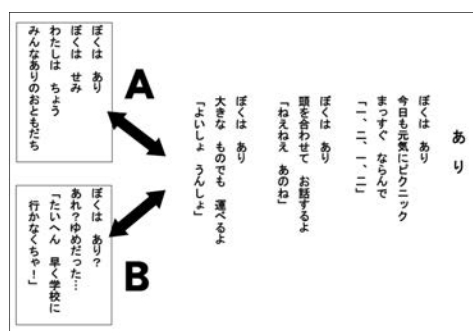


【段階を追って手がかりを学ぶ単元構成】

～個々の考えを明確にする複数の表現が可能な教材～

実態：1編の詩に対し、さまざまな変化のさせ方が可能であることを体験しなければ、実際の連詩づくりにおいては、多様な変化の視点を活用することが難しかった。

支援：右のような、複数の第4連を同時に選択できる詩を準備した。A「拡大」でも、B「転換」でも、一つの詩において同時に成立しうる教材である。



【手がかりを意識させる教材】

② 育てるカウンセリングを生かした支援

ア 本単元内で直接行う支援

実態：Q-Uから、34人中9名の子どもが、授業中に積極的に手を挙げて、自分の考えや意見を言うことにためらいを感じていることが分かった。個別に聞き取りを行ったところ、その理由として、友達に認められない不安から意見を言うことにためらいをもっていることを確認することができた。

支援：自由に相手を見つけながら、複数の友達とペアで考えを伝え合うペア対話をした後、よかったと思う友達の名前を発表する場をもった*1。このようなペア対話の際、教師は、子どもたちの中に入って、考えをうまく伝えられないような子どもの個別支援を行うことが多い。しかし、上記のような不安を抱えた子どもが多くいることを考慮して、全体対話の前に、その子たちのよさを見つけた子どもを指名できるように、本実践では、誰と誰がペア対話をしているのか、その見取りに徹した（対話の雰囲気）。

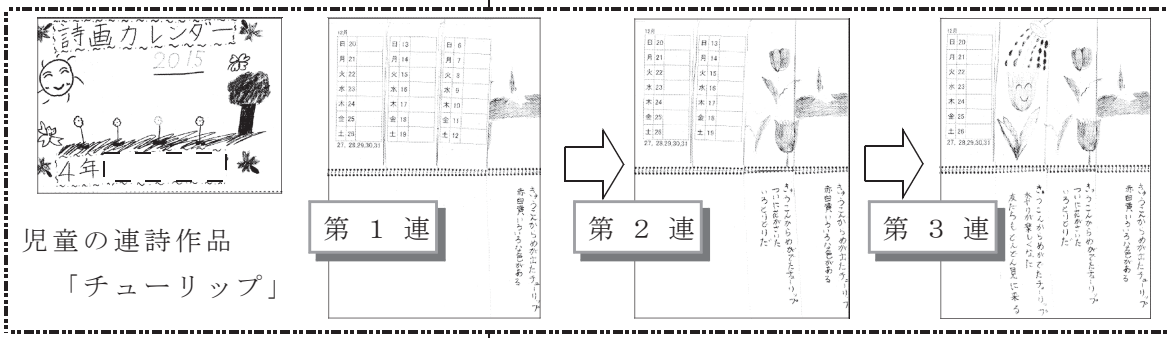
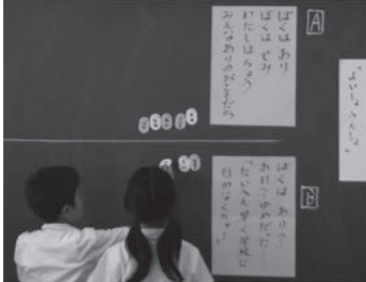


イ 本単元外での活動を想起・活用させる支援

実態：Q-Uから、相手に配慮することなく話しをしていると自覚している子どもが3名いることが分かった。しかし、教師の日頃の観察では、友達の気持ちを考えず平気で傷つくことばを発している子どもが、この3名以外にも少なからずいた。むしろ、相手が傷つくようなことばを発している、そのことに気付いていない3名以外の子どもの方が、より配慮を要すると思われた。

支援：朝の活動等で行った「相手がいやな気持ちにならないように話をする」*2技能を想起し活用できるよう支援した。聞き手の「OKサイン」「NGサイン」を提示しておき、それに留意しながら対話するよう促した（対話の技能）。

「*」…99頁参照

(3) 本実践における授業の実際

場面	授業づくり	実践の詳細
学習問題の確認	<p>単元を通して、詩画カレンダーをつくってきた。6月～12月までの7編の詩を書く。一週間ごとに短冊を1枚めくると、一連ずつ詩のことが、その絵と共に見えるようになる。</p>  <p>児童の連詩作品 「チューリップ」</p>	<p>子どもたちは、これまで、教科書所収の2作品を仕上げている。また、教師自作の詩『あり』と、友達と1連ずつ分担して作成している連詩の第3連までをつくっている。導入において、続きの第4連をつくることの確認を行った。</p>
	<p>すてきな詩画カレンダーをつくるために、第4連を工夫して書こう</p>	
多様な考えの表出	<p>第4連を工夫して書くには、「変化に気をつける」という既習の「手がかり①（次頁板書写真参照）」を振り返り、黒板に示した後、教師自作の詩「あり（前頁参照）」の第4連を提示した（教材）。</p>	 <p>子どもたちは、自分の詩画カレンダーに書きたい第4連を、個々に選択していった。その際、AとBの詩それぞれに、ほぼ半数ずつの名札が貼られた。</p> <p>【選択した詩に名札を貼る】</p>
ペア対話	 <p>【ペア対話前の支援】</p> <p>気をつける相手のサインを、教室掲示を用いて想起させた（技能）。</p>  <p>【ペア対話中は台上で見取り】</p>	<p>相手の表情や、そぶりに気をつけ、互いの意見をよく聴きながらペア対話を行っていた。</p> <p>まだ、考えが固まっていない中での対話であり、うまく言葉にまとまらないながらも、対話を通して、自分の考えを明確にしたり、友達の意見に納得し、詩の選択を変更したりしていった。</p> <p>【選択理由を伝え合う】</p> <p>C1：僕は、Aがいいよ。第1～3連は、ありのことで、第4連は、ありの友達を紹介していて、Aの方が変化があると思うからだよ。</p> <p>C2：私は、Bがいいな。第1～3連は、ありのことで、第4連は人のことになって、大きく変化しているからだよ。</p>

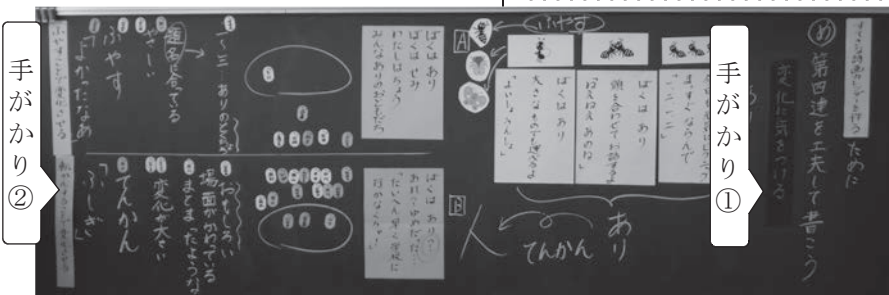
見取りを基に、発言に自信のない子らとペアになっていた子どもたち数名を意図的に指名した（雰囲気）。

多くの子どもが、紹介しようと挙手をした。

T：よかったと思う友達の名前を教えてください。

C3：〇〇さんの考えが良かったです。

全体対話



自信のなかった子どもたちも、友達に名前を紹介され、その後の全体対話で積極的に挙手し、自分の考えを述べる事ができた。

理由を述べ合う中で、子どもの反応を板書しながら、『あり』の詩のA Bが、それぞれ、既習の2編の詩の変化に対応していることに気付かせていった。

C4：Aは「増やすこと（拡大）」で、Bは「転換」です。Bの変化が大きいと思うのでBを選びました。

T：何の詩に似ていますか。

C5：『ふしぎ』です。自然の不思議から、あたりまえだと言う人への不思議に変わったように、ありから人へ転換しています。

そして、前時までの学びの履歴に記していた「手がかかり②」を、黒板に移動して示し活用を促した。

C6：Aの詩は、「ちょう」や「せみ」が増えていて、『よかったなあ』と似ています。

その後、自分たちの連詩の第4連を、自分の思いに応じて変化のさせ方を選択していく場をもった。

選択理由を伝え合う中で、既習の詩と結びながら、A Bそれぞれの特徴を共有することができた。

(4) 考察

① 成果

既習の詩の理解を深めたり、詩づくりに活用しうる手がかかりをより意識できるようになったりした。以下は、対話前後に、同一の質問をした際の回答である。

質問「第4連を工夫して書くためには、どんなことに気をつけたらいいと思いますか。」

子ども	学習問題確認時の考え	授業の終末での考え
i	・第4連を変化させます。	・転換する変化に気をつけます。
ii	・わかりません。	・変化に気をつけます。
iii	・増やしたり転換したりします。	・増やしたり転換したりします。

3名の児童の授業前の状態は異なるが、それぞれに認識を深めていることが分かる。iii児については、本時、『あり』について、拡大から転換に立場を変えたり、自分の詩づくりでは、拡大による変化を用いたりして、拡大と転換それぞれのよさを実感できていたことから、その思考の更なる深まりを見取ることができた。

② 課題

本実践における主要なねらいは、読みを深めることにあったものの、詩づくりにおいて、つまづいてしまう子どもがいた。連を構成する際の手がかかりが、「転換」「拡大」までに留まり、限定的であったことが要因であろう。今後、より多様で柔軟な学びの展開が求められる。